

九州大学 教授 山崎徳也
九州大学 大学院 石川信隆
九州大学 学生 黒木健実

1 緒言

著者は先に弾塑性領域における曲げモーメントと軸方向力との影響を考慮した2ヒンジ円弧アーチのたわみ⁽¹⁾を弾性曲線法を用いて厳密に考察したが、本論文ではエネルギー法により矩形等断面をもつ円弧アーチの弾塑性基本式を誘導し、固定アーチを対象として弾塑性解析を行った。その手法は塑性ヒンジの発生により円弧アーチをそのヒンジ点で分割する必要が生ずるため、演算当初よりヒンジ発生予想位置すなわち最大応力点で分割しておけば解析上便利である点を考慮し、通常のせり高をもつ円弧固定アーチ(半開角 $30^\circ \sim 90^\circ$)を2~4ヶの扁平円弧アーチ(半開角 $10^\circ \sim 30^\circ$)に分割して、その分割点で変形法⁽²⁾に基づく節点の曲げモーメントおよび力の釣合式をたわみとたわみ角の連続条件式を用いて、分割点の不静定量を逐次近似法により算定することとした。

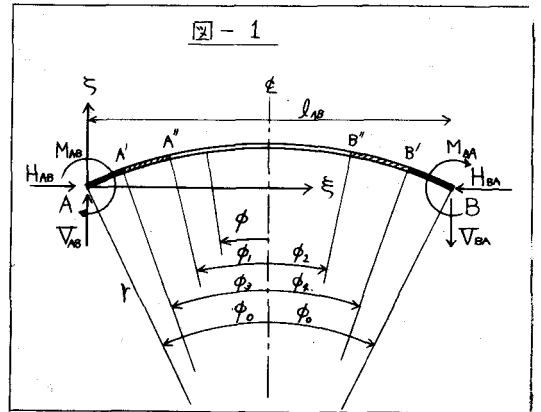
2 円弧アーチの基本式

弾塑性領域における曲げモーメントと軸力とを考慮した精密エネルギー式⁽³⁾は次式で表わされる。

$$U = \frac{M_y^2}{2EI} \int_E (m^2 + 3n^2) ds + \frac{M_y^2}{2EI} \int_{P_1} \left[3(n-1) + \frac{g(1-n)^3}{3(1-n)-m} \right] ds + \frac{M_y^2}{2EI} \int_{P_2} (3 - 2\sqrt{3-gm^2-2m}) ds \dots (1)$$

E は EI : 曲げ剛性, $m = M/M_y$, $n = N/N_y$, M_y および N_y は降伏曲げモーメントおよび降伏軸力, ds : 微小軸長, 積分記号 E, P_1, P_2 はそれぞれ弾性領域, 第1弾塑性領域, 第2弾塑性領域の長さを示す。

いま図-1に示す弾塑性円弧アーチ部材 AB を考え、両端 A, B に第1弾塑性領域 $A'A'', B'B''$ および第2弾塑性領域 AA', BB' が生ずるものとするれば、エネルギー式は式(1)より次のごとくなる。



$$\frac{EI}{M_y^2} U = \int_{-\phi_1}^{\phi_2} (m^2 + 3n^2) d\phi + \int_{-\phi_2}^{-\phi_1} \left[3(n-1) + \frac{g(1-n)^3}{3(1-n)-m} \right] d\phi + \int_{\phi_2}^{\phi_1} \left[3(n-1) + \frac{g(1-n)^3}{3(1-n)-m} \right] d\phi + \int_{-\phi_2}^{-\phi_1} (3 - 2\sqrt{3-gm^2-2m}) d\phi + \int_{\phi_2}^{\phi_1} (3 - 2\sqrt{3-gm^2-2m}) d\phi \dots (2)$$

任意点の曲げモーメントおよび軸力は図-1より一般に次のように表わせる。

$$M = \frac{l_{AB} - \xi}{l_{AB}} M_{AB} - \frac{\xi}{l_{AB}} M_{BA} - \xi H_{AB} + M_{AB}^0$$

$$N = H_{AB} \cos \phi - V_{AB} \sin \phi + N_{AB}^0$$

ただし $\xi = r(\sin \phi + \sin \phi_0)$, $\zeta = r(\cos \phi - \cos \phi_0)$, r : 半径, M_{AB}^0 , N_{AB}^0 はそれぞれ単純アーチはりの荷重による任意点のモーメントおよび軸力を表わす。

しかるに扁平アーチを取り扱うゆえ軸力はその水平反力で近似できる。こゝで式(2)に変分原理を適用して両端の切線角 θ_A , θ_B および部材の伸縮 Δl を求めた後, $\theta_A = \theta_{AB} - R$, $\theta_B = \theta_{BA} - R$ の置換を行えば基本式は次のようになる。

表-1

$$\left. \begin{aligned} \theta_{AB} - R &= \frac{M_{AB} r}{EI} D_{AB} \\ \theta_{BA} - R &= \frac{M_{BA} r}{EI} F_{AB} \\ \Delta l &= \frac{M_{AB} r}{EI} G_{AB} \end{aligned} \right\} (3)$$

D_{AB}	$\int_{-\phi_1}^{\phi_2} m \frac{l-\xi}{l} d\phi + \int_{-\phi_2}^{-\phi_1} f_1(\phi) \frac{l-\xi}{l} d\phi + \int_{\phi_2}^{\phi_1} f_1(\phi) \frac{l-\xi}{l} d\phi + \int_{-\phi_1}^{-\phi_2} f_2(\phi) \frac{l-\xi}{l} d\phi + \int_{\phi_1}^{\phi_2} f_2(\phi) \frac{l-\xi}{l} d\phi$
F_{AB}	$-\int_{-\phi_1}^{\phi_2} m \frac{\xi}{l} d\phi - \int_{-\phi_2}^{-\phi_1} f_1(\phi) \frac{\xi}{l} d\phi - \int_{\phi_2}^{\phi_1} f_1(\phi) \frac{\xi}{l} d\phi - \int_{-\phi_1}^{-\phi_2} f_2(\phi) \frac{\xi}{l} d\phi - \int_{\phi_1}^{\phi_2} f_2(\phi) \frac{\xi}{l} d\phi$
G_{AB}	$-\int_{-\phi_1}^{\phi_2} m \zeta d\phi - \int_{-\phi_2}^{-\phi_1} f_1(\phi) \zeta d\phi - \int_{\phi_2}^{\phi_1} f_1(\phi) \zeta d\phi - \int_{-\phi_1}^{-\phi_2} f_2(\phi) \zeta d\phi - \int_{\phi_1}^{\phi_2} f_2(\phi) \zeta d\phi$ $-R \int_{\phi_2}^{\phi_1} f_3(\phi) \cos \phi d\phi - R \int_{-\phi_1}^{-\phi_2} f_3(\phi) \cos \phi d\phi + 3R \int_{\phi_2}^{\phi_1} f_3(\phi) \sin \phi d\phi - R \int_{-\phi_1}^{-\phi_2} f_3(\phi) \sin \phi d\phi$ $+ 3R(\sin \phi_3 + \sin \phi_4)$ ただし l は l_{AB} のことである
	$f_1(\phi) = 4(1-n)^3 / \{3(1-n) - m\}^2$ $f_2(\phi) = 1 / \sqrt{3 - 3n^2 - 2m}$ $f_3(\phi) = 12(1-n)^2 \{2(1-n) - m\} / \{3(1-n) - m\}^2$

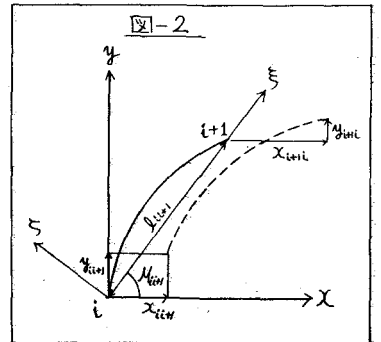
こゝに式(3)の D_{AB} , F_{AB} , G_{AB} は扁平アーチの形状(半開角 ϕ_0), M_{AB} , M_{BA} , H_{AB} , M_{AB}^0 および ϕ_j ($j=1, 2, 3, 4$) の函数であり表-1に示す内容をもち, Simpson 公式による数値積分を行う。

3. 固定アーチの弾塑性解析

式(3)の扁平アーチ部材の基本式を用いて2ヶないし最高ヶまでの扁平アーチを多円弧状に連結すれば, 通常のせり高をもつ固定アーチの弾塑性解析が可能となるが, その解析手法は弾性解析に慣用の変形法に準ずればよい。すなわち図-2より部材角 R および部材伸縮 Δl は水平および垂直変位の函数として次のように表わせる。

$$R = \left[(x_{ini} - x_{iim}) \sin M_{iit} - (y_{ini} - y_{iim}) \cos M_{iit} \right] / l_{iit}$$

$$\Delta l = (x_{iim} - x_{ini}) \cos M_{iit} + (y_{iim} - y_{ini}) \sin M_{iit}$$



こゝを式(3)に代入した後, 図-3に示す部材 $i, i+1$ および $i, i+1$ に適用すれば, 基本式はそれぞれ次式となる。

$$\begin{aligned}
 \theta_{i-1} &= \theta_{i+1} - \frac{My}{EI} (D_{i-1} - F_{i-1}) \\
 x_{i-1} &= x_{i+1} - \theta_{i-1} l_{i-1} \sin M_{i-1} - \frac{My}{EI} (l_{i-1} D_{i-1} \sin M_{i-1} + G_{i-1} \cos M_{i-1}) \\
 y_{i-1} &= y_{i+1} - \theta_{i-1} l_{i-1} \cos M_{i-1} + \frac{My}{EI} (l_{i-1} D_{i-1} \cos M_{i-1} - G_{i-1} \sin M_{i-1}) \\
 \theta_{i+1} &= \theta_{i-1} + \frac{My}{EI} (D_{i+1} - F_{i+1}) \\
 x_{i+1} &= x_{i-1} - \theta_{i+1} l_{i+1} \sin M_{i+1} + \frac{My}{EI} (l_{i+1} F_{i+1} \sin M_{i+1} + G_{i+1} \cos M_{i+1}) \\
 y_{i+1} &= y_{i-1} + \theta_{i+1} l_{i+1} \cos M_{i+1} - \frac{My}{EI} (l_{i+1} F_{i+1} \cos M_{i+1} - G_{i+1} \sin M_{i+1})
 \end{aligned} \tag{4}$$

一方任意点 \$i\$ のたわみ角およびたわみの連続条件式は次式であたえられる。

$$\begin{aligned}
 \theta_{i-1} &= \theta_{i+1} \\
 x_{i-1} &= x_{i+1} \\
 y_{i-1} &= y_{i+1}
 \end{aligned} \tag{5}$$

また力の釣合式は図-3より次式となる。

$$\begin{aligned}
 M_{i-1} + M_{i+1} + M_i^e &= 0 \\
 H_{i-1} \cos M_{i-1} - H_{i+1} \cos M_{i+1} + (M_{i-1} + M_{i+1}) \sin M_{i-1} / l_{i-1} \\
 - (M_{i+1} + M_{i-1}) \sin M_{i+1} / l_{i+1} - V_{i-1}^e \sin M_{i-1} + V_{i+1}^e \sin M_{i+1} + H_i^e &= 0 \\
 H_{i-1} \sin M_{i-1} - H_{i+1} \sin M_{i+1} - (M_{i-1} + M_{i+1}) \cos M_{i-1} / l_{i-1} \\
 + (M_{i+1} + M_{i-1}) \cos M_{i+1} / l_{i+1} + V_{i-1}^e \cos M_{i-1} - V_{i+1}^e \cos M_{i+1} + V_i^e &= 0
 \end{aligned} \tag{6}$$

こゝに \$M_i^e\$, \$H_i^e\$, \$V_i^e\$ はそれぞれ \$i\$ 点に作用する外力の曲げモーメント, 水平力および鉛直力であり, \$V_{i-1}^e\$, \$V_{i+1}^e\$ はそれぞれ部材 \$(i-1)\$ および \$(i+1)\$ に働らく中間荷重による \$i\$ 点のせん断力である。

さらに塑性領域を示すパラメータ \$\phi_1\$, \$\phi_2\$ などに対しては弾塑性境界条件より次のごとく表わせる。

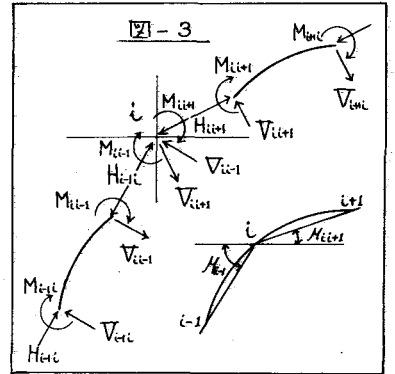
$$\begin{aligned}
 \frac{1}{2} \left(1 + \frac{\sin \phi_1}{\sin \phi_0}\right) m_{i+1} - \frac{1}{2} \left(1 - \frac{\sin \phi_1}{\sin \phi_0}\right) m_{i-1} - r(\cos \phi_1 - \cos \phi_0) h_{i+1} / h + m_{i+1}^0 &= 1 - n \\
 \frac{1}{2} \left(1 + \frac{\sin \phi_2}{\sin \phi_0}\right) m_{i+1} - \frac{1}{2} \left(1 - \frac{\sin \phi_2}{\sin \phi_0}\right) m_{i-1} - r(\cos \phi_2 - \cos \phi_0) h_{i+1} / h + m_{i+1}^0 &= 1 + n - 2M^2
 \end{aligned}$$

ただし \$h = My / N_y\$, \$m_{i+1}^0 = M_{i+1} / My\$, \$n = h_{i+1}\$ である。

こゝに両端の固定条件として両端の水平, 垂直変位およびたわみ角を 0 にすれば, 未知数の数と方程式の数が同数となり, 収斂計算を行えば所要のモーメント, 軸力および弾塑性範囲が求まることになる。

4 例題

図-4に示すごとき固定アーチの中央点に集中荷重 \$P\$ が作用するときの弾塑性解析を中央で分割して行った。



分割点 1 において対称条件より

$$\left. \begin{aligned} \theta_{10} &= 0 \\ \chi_{10} &= 0 \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots (7)$$

次に $i=1$ を式(4)に代入し、しかる後に点 0 の θ_0, χ_0 および y_0 を 0 とおけば次式をうる。

$$\left. \begin{aligned} \theta_{10} &= -\frac{Myr}{EI} (D_{01} - F_{01}) \\ \chi_{10} &= -\frac{Myr}{EI} \left(\frac{1}{2} l \tan \frac{1}{2} \phi_0 \cdot D_{01} + G_{01} \cos \frac{\phi_0}{2} \right) \\ y_{10} &= \frac{Myr}{EI} \left(\frac{1}{2} l D_{01} - G_{01} \sin \frac{1}{2} \phi_0 \right) \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots (8)$$

式(7)に式(8)を代入して次の連立方程式をうる。

$$\left. \begin{aligned} D_{01} - F_{01} &= 0 \\ \frac{1}{2} l D_{01} \tan \frac{1}{2} \phi_0 + G_{01} \cos \frac{1}{2} \phi_0 &= 0 \\ y_{10} = \frac{Myr}{EI} \left(\frac{1}{2} l D_{01} - G_{01} \sin \frac{1}{2} \phi_0 \right) \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots (9)$$

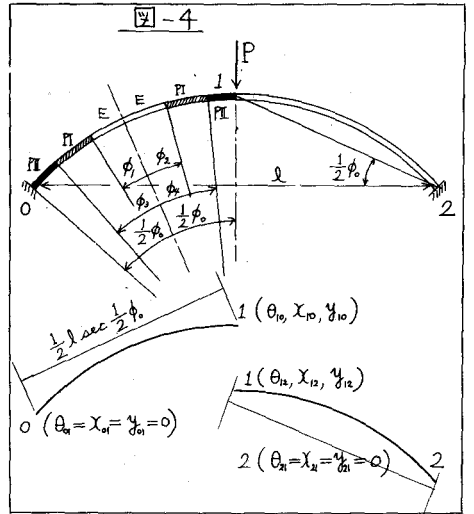


表-2

分割点 1 における鉛直方向の力の釣合式は

$$H_{01} \sin \frac{1}{2} \phi_0 - \frac{2}{l} (M_{01} + M_{10}) \cos \frac{1}{2} \phi_0 - \frac{1}{2} P = 0$$

となり、これを My で割って無次元化するば

$$l \frac{h_{01}}{r} \sin \frac{1}{2} \phi_0 - 2(m_{01} + m_{10}) \cos \frac{1}{2} \phi_0 - \frac{1}{2} P = 0 \quad (10)$$

となる。ただし $P = Pl / My$

さらに図-4のごとく弾塑性領域が生じたものとするば、弾塑性境界条件式は次のごとく表わせる。

$$\left. \begin{aligned} m(-\phi_1) = m(\phi_2) &= 1 - n \\ m(-\phi_3) = m(\phi_4) &= 1 + n - 2n^2 \end{aligned} \right\} \dots\dots\dots (11)$$

ここで式(9), 式(10), 式(11)を用いた計算過程を表-2に示す。

5 結 語

本論文は円弧固定アーチの弾塑性解析が数値積分に基づく逐次近似法により可能となることを示したもので、電子計算機の発達した現在では、上記誘導の基本式を用いてさらに未知数の多い連続アーチにも適用可能となる。

参考文献

- (1) 山崎・石川：2ヒンジアーチの弾塑性たわみ，昭和40年5月，第20回年次学術講演会講演概要
- (2) T.YAMASAKI：Analysis of Semi-Rigid Frame with Curved Members considering the Effect of Rigid Joint-width, Proc. of the 12th Japan National Congress for Appl. Mech. March, 1963
- (3) 山崎・石川：弾塑性解析に用いる変形法の基本式の誘導，昭和40年度土木学会西部支部研究発表会論文集